

二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版

# 陰陽生徒会

呪いの鎖

小説 高岡智空 挿絵 藤岡とき



第一章 陰陽生徒会長の受難

第二章 敗北と痴宴

第三章 学園を覆う淫呪牢

第四章 淫式墮悦

第五章 牝豚奴隸

006

059

118

176

238

## 登場人物紹介

Characters



みさかりお  
**神坂 理央**

陰陽師「神門家」の分家「神坂家」の長女。学園生活を過ごしながら、早苗と共に陰陽師としての仕事もこなす。学内では生徒会長を務める。



みかど さなえ  
**神門 早苗**

名門陰陽師の宗家「神門家」の長女で、家を継ぐ一人娘。面倒くさがりの理央と対照的に優しく理知的。学内では生徒会副会長を務める。

りくどう あきみつ  
**六道 彰光**

西の陰陽本山に属していた少年。面倒な仕事をこなすのが嫌になり、陰陽師の他家の女を従わせ、自分の手駒にしようとする。

突然の予想しない言葉に、蓄積されていた昂りが一瞬で失われた。理央は蒼白になってカタカタと小さく震え始める。こんな痴態を晒した姿のまま自分のことを気づかれてしまうなど、なんとしても避けたい最悪の事態だ。けれど理央の不安を煽るような言葉が、周囲から次々と投げかけられる。

「うっそ、お前もかっ?」「実は俺も……誰だっけな」「すげえ最近見たんだけど……」

そんな議論を耳にし、理央は気が気ではなかった、鼓動はバクバクと激しく脈打っており、必死に気づかれぬことを願う。けれど――。

「わかった! 会長じゃねえっ?!」「え……あ、そうだ!」「そっか! 髪とか胸とか……たしかに、そっくりだわ」「これまさか本人……じゃねえよなあ?」

(や、やだ……やめてっ、お願い……)

ついに気づかれてしまった――あまりのショックに顔色が青を通り越して真っ白に染まる。だが、幸いなことに彼らはまだ自分が本人だとは思っていない。なんとか誤魔化さなければ、でもどうすれば……夢中で考えていると、六道がクスツと笑いを響かせた。

「ははっ、残念だけど本人じゃないよ。でも興奮するでしょ、あんなエロい身体ของ会长にそっくりな女が、こうやって拘束されて口でしてくれるなんてさ」

六道の言葉が響き渡り、そのまま静寂となつて場に染み込んでゆく。そして――。

「そうだな……へへっ、それじゃ頼みますよ、会長!」

(ひうううんっつ!! あぐっ、い、いきなりいつ……んひいつ!)

動きの止まっていた男子が理央の口を物のように扱い、突然激しく腰を振り立てて、己の欲望を一心不乱にぶつけてくる。

「妄想でお世話になってた會長が、エロボディ揺らしてしゃぶって……最高っすよ！」  
「んぐじゅっ！　じゅぶっ、んおっ……ぐぶっ、んふうんっ、あぐっ……」

肉棒がぶつけられるたび、喉奥が灼けるように熱く火照り、擦られる内頬や舌の表面がジンジンと痺れさせられる。けれどなにより、自分が後輩の男子たちに性の対象として見られていたという事実——それがたまらない羞恥となって身体の奥に食い込み、切なくなるような疼きを生みだしてくる。

（そ、そう、なんだ……あたし、皆から、こんな風に……んうっ、ふああっ……）

恥ずかしくて屈辱さえも感じるオナペットとして見られているというのに、戸惑いとも押し寄せる昂揚感が、キュンッと胸をわななかせてくる。

（なん、で……あたし、こんなっ……ひゃんっ！）

もつと怒らなければならぬ状況なのに、与えられる快感に蕩かされて怒りが薄れ、ぶつけられる情欲を優しく受け止めてしまう、そのことが信じられない。

「うっは、會長優しいっすねー」「オナホみてーに犯されてんのに、丁寧にしゃぶっちゃってさあ」「いつそ男子トイレで精液便所とか、やってみませんかー？」

ギャハハッと男子たちの笑いが響くのに、心にゾクゾクと湧き立つのは、浅ましい快感の波だった。これは自分の感情じゃない、式神によって教え込まれた女の悦びが身体に満

ちているせいで、牡に求められて興奮させられているだけ——そのはずなのに。

(んあつ、はあう……うん、なん、か……頭、があ……んふうっ！)

喉を貫かんばかりに牡槍を突き入れられ、激しい衝撃に頭の裏側まで快感が弾け飛ぶ。真つ暗だった視界には肉棒の熱さを押しつけられるたびに光が飛び、グチュグチュと口内を抉り犯される息苦しさと相まって、目の前が真つ白に染められる。

(ひうっ、はあつ、ああつっ！ やっ、んっ……)

「すげえ……会長の乳、タップンタップン揺れてるぜ！」「太ももとニーソも、抜群にエロいよなあ」「椅子の上までグシヨグシヨとか……感じすぎじゃないっすかあ、会長？」

耳から流し込まれる淫猥な嘲笑に、カアアツと耳が赤く染まる。彼らは自分が神坂理央本人だと知って言っているのではない、それはわかっているのに——。

(はうっ、あんっ……み、見られて、るう……)

彼らの言うような痴態を晒しているのは、自分自身なのだ。喉を突かれて瞳を蕩けさせるたび、腰をカクカクと揺すって椅子に押しつけ、股間の淫液をクチュクチュと溢れさせていることを自覚し、堪えようもない羞恥に包まれてしまう。

(はあ、あつ……ひううっ、か、感じ、すぎい……)

舌がくねって裏筋をチロチロと舐め上げ、まるで感じる場所へもつとペニスを擦りつけて欲しいとばかりに、おねだりじみた奉仕をしよう。

(ちが、う……これは、さつさと、イカせなきゃ……終わら、ないから……あんっ)

舌先が弾かれるように亀頭で小突かれ、そのまま口内粘膜を抉り、喉奥へ沈み込む。けれどすぐさま引き抜かれた牡槍は、絡みつく柔らかな頬肉をこそぎ、背筋を粟立たせるような至高の快楽を流し込んでくる。一突きされるごとに頭がビクンッと跳ね上がり、その快感に促されて理央は積極的に唇を窄め、チュウチュウとペニスを吸ってしまふ。

(あうっ、はあっ、ああん……なに、これえっ……変なのがっ……くひいっ！)

濡れそぼった股間から痺れるような感覚が突き上がり、脊髓を伝って全身に満ちてゆく。ゾクゾクッと背筋が震えるのに身体中が熱く、男子の腰が叩きつけられるたびに、四肢が痙攣したように跳ねて弾ける。

「んぐううっ、ぐぷっ、んじゆるるっ……んうっ、んふううっ……ひふううっ！」

「なあ、これってよ……」「ああ、イッチまうんじゃねーか?」「マジッ?! 口だけで?」

周囲でなにかささやかれるが、そんな言葉は耳に入らない。頭の中には火花がバチバチッと激しく散り、どんなに恥ずかしい真似をしているのか、認識できないほどの混乱が渦を巻く。あれほど嫌悪を覚えていた牡臭に鼻腔を灼かれ、熱い肉塊の感触に口内をドロドロに蕩けさせ、舌を懸命にくねらせてしまふ。

(あうっ、んひっ、ひいん……ひぐっ、な、なにか、きてるっ、きちやううっ……)

意識が朦朧としているのに、股間から込み上げる雷のような激しい痺れが、身体の奥深くに突き刺さってゆくのがはつきりと感じられる。腰が叩きつけられ、喉奥を抉られるたびに頭の裏側がドクドクと脈打ち、目の前に激しい光が明滅していた。

(変つ、へんにつ……なつて、くふううつ……んぐつ、んじゅつ……ひぐふううつ!?)

ほつれた髪が額に絡みつき、全身にかいた汗でブラウスも肌が透けるほどに濡れている。激しい動悸に呼吸は甘く乱れ、身体の奥へ染み込んだ快感が爆発しそうなほど濃密に膨らんでいた。そこへ――。

「はつ、はああ……よしつ、イクぜつ……遠慮しないで飲んでくださいよつ、会長おつ!」

――ニチュツ、グポオツ、ゲヂュウツ!

「んふううんつつ! んぐつ、んんうう――つつ!」

上顎の粘膜をこそぎながら亀頭の先端まで引き抜かれた牡槍に、一気に喉奥までを刺し貫かれる。窄められていた震える口内媚粘膜を貫通され、頭の裏側で灼熱の淫火が巻き起こる。理央は瞳を大きく見開き、全身を激しく痙攣させて背を仰け反らせ――。

(ひやぐうううつ、んあつ、はああんうつ! くはあんつ、きちやうつ……くるつ、変なのつつ! くるのおおおつ……んあああ――つつつ!)

――ビュルビュルツ、ビクウツ! ドビュルツ!

「んぐつ、ひはああつ! んおつ、おごおお……んぶつ、んじゅつ、あぐううつ!」

粘っこい精塊を喉粘膜にぶちまけられながら、頭の中を真っ白に染め上げられ、理央は幾度も身体をはね上げるように、激しく痙攣してしまう。四肢がガクガクとわななき、全身から汗が噴きだして、想像を絶するほどの熱さと快感に包まれてゆくのを感じる。

(あひゅううつ、ひはつ、あつ、はああつ! もえつ、燃えちやううつ、くううんつ!)

頭の中は真っ白になり、快感の爆発としか思えない激しい衝撃が全身を貫き、バラバラにされるようだった。腰がガクガクと揺さぶられ、股間からドブドブと激しく淫蜜が噴き出ていることさえ気にならず、首を振りたくって椅子の上で暴れてしまう。

(んくっ、くひゃいいい……まじゆいのっ、くひにい……んぐっ、んじゅうう……)

口いっぱいにぶちまけられた牡液の塊が、舌に絡め取られて喉奥へ流れ込む。押し潰された精液ダマから濃厚な生臭さが立ち上り、胸の奥が煮えくり返りそうに熱く火照る。身体の内までがカアツと燃え上がり、ザーメンを絞り取る舌の動きに反応して、ビクンツと腰がひと際大きく跳ね上がった。

「うっわ、この女マジでイッてやがる」「潮吹いてんじゃねえ？ この濡れっぷりは」

(あひゅっ、んあっ、はああ……あん、い、やあ……)

おもらしをしてしまったかのような下半身の惨状、そしてそれを突きだすような格好にようやく思い至り、理央は真っ赤になった顔を背けて恥じ入る。その拍子に男子生徒の萎えた肉棒がチュポツと音を立てて抜き取られたが、射精し尽くして満足した少年はその先端で理央の顔をなぞり、離れていった。

「あぶっ、んっ……げほっ、えほおっ……うええ……」

飲み込み損ねた牡汁が口から溢れだし、唇をテラテラと濡れ汚しながら、流れ落ちる。

(んいつ、はあっ……やあっ、身体、にい……におひっ、ついちゃう……制服も、ドロドロオ……く、くさい、のにい……んぐっ、んうう……)

肺いっぱい広がる精臭がそうさせるのか、吐息さえもその臭いで覆い尽くされたように、呼吸をすると生臭さしか感じられない。最低の汚辱で心はズタズタ、それなのに垂れ下がった舌に精液が触れると、途端に背中がゾクツと痺れて震え上がってしまう。

(うっ、ううう……こんなっ、あたしっ……嘘っ、嘘よお……ひぐっ、んはああ……)

絶頂の名残はいまだ肉体を蝕み、衣服が擦れるだけで身が跳ねるほどに快感をもたらした。唇から垂れ落ちた精液は制服にこびりつき、どこまでも淫靡な雰囲気を漂わせている。その光景に煽られた男子たちが、私も股間を熱くして群がってくる。

「あー、くっそ、たまんねえよ!」「俺も、俺も!」「次は顔に射精すっかな〜」

(えっ……やだっ、そんなっ……はうんっ! んひっ、ひはああっ!)

もはや一人ずつ順番に奉仕されることでは我慢できなくなっただのか、美少女の顔を汚す欲望に目覚めてしまったのか——男子たちは口だけにこだわらず、額や頬までに肉棒を擦りつけ、獣欲を満たそうとする。

(ふあっ……あうんっ! あっ、いい……ドロドロの、くさいのお……うん……)

早漏な少年の精液が熱く顔を撃ち、胸中で悲鳴をもらしながらも肉体をはね上げてしまう。自身からだけでなく、周囲から立ち上る精臭に包まれた理央は、もはやなにをしているのかも理解できず、口奉仕の快感に蕩け、舌を伸ばしてしまっていた——。



「はあっ、う……っぐ、う……」



——ゲニイイ……ズチュツ、ジュツプウウツ!

男子が雄叫びとともに尻房を大きく左右に割り開き、グリグリと菊皺をこじ開けるようにして、三本目の指までも強引に捻じ込んできた。腸液で飛沫が舞うほどの激しい抽挿に、早苗はガクンツと大きく頭を振りたくって、あられもなく叫び放つ。

「あぎゅううつつ!! やらっ、ひやめええつ、はひつ、ひいひいんつ! はげひつ、はげひいっ! あひゅううつ、イツひや、イツ、ひやふううつ!」

絶頂の渦へと突き落とされそうな肉欲を、小指の先ほどの理性で繋ぎ止めて必死に訴える。けれど男子たちはさらに指の動きを大きくし、ジュプジュプと腸液を掻きだすように菊粘膜を抉り続ける。

「嘘つくなよ、イキてえんだろ?」「遠慮しないでいいんだぜ、ほれっ、ほれっ!」

「はひゅううつ、やらっ、やめへええつ! んほつ、イきゅつ……ううつつ、ひぐつ、のおおつ……イツちや、らめ、らからあ……んひつ、ふあ——」

直腸粘膜を押し広げながら引つ掻いてゆく硬い感触に、意識が飛んでしまうほどの快感を注ぎ込まれ——あまりの衝撃に瞳を大きく見開いて息を詰まらせた早苗は目の前に火花を飛び散らせながら、とうとうはしたない絶叫を響かせてしまう。

「はぎっひい——んんつつ! はひつ、ひぐつ、いぐふううつ——っ!」

普段の楚々とした姿など欠片も感じられぬ、獣のように下品な喘ぎとともに、喉奥からけたたましい悲鳴が飛び出す。大きく腰を突きだして淫らに振り乱し、ブリッジのように

背を反り返らせ、男子たちの腕の中でビクンビクンと激しく痙攣する。

「ひやらっ、ぬひてえええんっつ！ らめっ、なの、にいつ……イッてりゅううっつ！」

身体中の細胞が快感で爆発してしまったような衝撃に、目の前が暗く染まってゆく。とんでもない飛翔感が脳天まで突き抜け、快感に蕩かされて感覚が麻痺したように痺れてゆく。弛緩した括約筋は縮まりを失い、ビュルビュルッ、ボタバタァッ……と淫猥な水音を響かせて、体育館の床にはしたない水溜まりが広がる。濃密な牝の香りが辺りに立ち込め、周囲からは冷たい蔑みの声がささやかれた。

「お尻弄られてイクなんて、どれだけ変態なんだか」「ほんと、いやらしい……最低ね」「オマンコもこんなにヒクヒクさせて……うわっ、また噴いてるじゃないの」

「ひやぐっ、み、みりゃい、れえ……んううっ」

羞恥と屈辱に赤く染まった顔を背けようとすると、背後から頭を支えられて、下腹部に視線を向けられてしまう。そこには噴出した早苗の愛液で顔をしとどに濡らした男子の顔があり、眼前には腸液に塗れてドロドロになった男子の指が近づけられる。

「すげえイキっぷりだな、淫乱副会長？」「ほれ、これが自分のケツマンコ汁だぜ？」しっかりと綺麗にしてくれよ、その可愛らしいエロ舌だよ」

自らの汚液を顔中に塗りたくられ、涙を流しながら嗚咽をこぼす。そんな姿を笑われながら、またも肛門へ指を咥え込まされ、陵辱が再開される。

「んやああっつ！ も……もう、いひやっ……やああっつ、あひっ、ひやぐううっつ！」

——それを遠くに見つめ、理央は嗚咽をもらす。

「さな、ええ……ゴメ、ンッ……ゴメンね……」

快感に大きく背中をはね上げ、嬌声と悲鳴を響かせる早苗。それでも理央はなにもできず、ただ謝罪を繰り返すことしかできない。

（早苗を、守らないといけないの……こんな、目の前で穢されて……あたし……）

嘲笑を浴びて恥辱に塗れる早苗の姿に涙が流れ、後悔と怒りと悲しみが怒濤の如く押し寄せる。けれど、そんな無力さを嘆く暇もなく、理性を失った級友たちの魔の手が理央にも襲いかかってくる。

「あはっ、早苗も素直になっちゃったし、もう遠慮しなくていいんじゃない？」

「んえっ……ひゃふうっ！ ダメッ、あああっ！」

胸を這い上がった熱い感触に、ビクンッと身体が震えた。逃れようと身体を振った瞬間、乳房を撫でていた指が肉丘にズブズブと沈み込み、強烈な快感が視界を真っ白に埋め尽くしてしまふ。ゾクゾクと込み上げる切ない感覚は、少しばかりも抑えられない。

「はふううんっ!? あひっ、ひいんっ！」

硬くしこりがあるはずの乳房の奥を揉みほぐされているのに、豊乳は痛みを感じるどころか悦びに蕩けて指に吸いついてしまふ。甲高い悲鳴に嗜虐的な笑みを浮かべた少女たちはますますいやらしい手つきで乳球を捏ね回し、身体中が火照らされるような熱い疼きを肉体の芯に埋め込んでくる。

(んにやつ、なにい、これえ……さつきまで、とつ、違うう……ひゆうつ、ふわつ……)

五本の指がまるで違う動きをしながら、入念に双丘が弄られる。根元から搾り上げる手の動きを感じるのに、乳首を二本の指でコリコリと転がされ、乳輪ごと乳肉が押し潰される。何人もの手で愛撫されているかのような感覚に、理央はいやらしい喘ぎを叫びながらガクンガクンと腰を跳ねさせて、少女たちの嘲笑を買うことしかできない。

「はひゅつ、ひふうう……ひやうつ、ううん……」

「やらしい腰振りねえ、理央ったら」「そんなにオッパイ弱いのか?」「乳首もコリコリしてるわよ、触つてゝつておねだりのつもり?」「あははつ、やゝらし」

片方の乳房がひたすら乳肉を捏ね回されているのに、もう片方の乳房は乳輪から下を押しさえつけたまま、乳首を指先で抓んで振るように引つ張り、ゴシゴシと扱き立ててくる。灼けた針を刺されたように胸の先がジンジンと疼きつばなしで、少女の指の中で硬さを増して肥大してゆく感触が恥ずかしくてたまらない。けれど爪先で引つ搔くように擦られると喉奥から嬌声を搾り取られ、背中をピンと張り詰めさせて腰を突きだし、どうしてもはしたない格好をするのを止められなくなる。

「あぐううんっ! やめつ、てええつ! ひいんんっ、むにえつ、いひゆううつっ!」

豊乳の形が幾度も歪み、乳輪の裏側が張り詰めたように硬くなつて、もどかしくてたまらない切なさが込み上げてくる。もつと色んな感触を味わいたいとも言わんばかりに揺れ躍る双丘にピチャリと生温かい感触が這うと、それだけで背中が震えた。

「待つて……舐めちゃ、やつ……きやふううつ!! やらつ、嘸まなつ……ひううんつ!」  
数人の少女が一斉に顔を寄せ、扱かれている乳頭をペロペロと舐め回し、口に含んで歯先で転がしながら、フェラチオのように唇を窄めて吸い上げてくる。唇で乳首を挟まれたかと思うと舌先で強く弾かれ、唯一自由の利く腰だけが大きく跳ねる。

(んぐううつ、ダ、メエ……こ、れ……強烈、んふううつ! が、我慢……くああつ!)

生温かい鼻息を肌に沿って意識が蕩け、陰核以上の敏感さを持つ乳房から、快樂の奔流が止めどなく溢れる。ガクガクと痙攣した全身は汗や淫液に濡れ染まり、いやらしい牝臭を濃厚にまとっている。

「もう絞れるくらいブルマがドロドロよ……早苗がイッたの、そんなに羨ましかつた?」  
(ちがつ、ふうつ……そつ、な……ことお……ふやつ、ひゃああん……)

イクという言葉が耳に触れた瞬間、男子たちの腕の中で早苗を迎えた、艶やかな絶頂の様子が脳裏に浮かび上がる。肉の悦びで満たされたあの笑顔に、けたたましい絶叫——それを考えると膣奥がギューウツと締めつけられるような切なさに疼き、淫唇が口を開いて股布と粘膜を擦り合わせてしまう。

「ほら、理央も我慢なんてしないで……ね?」

「が、我慢なん、てえ……ひて、ない……か、感じて……な、いい……ひううつ!」

心に絡みつく一抹の理性だけを頼りに、なんとか否定の言葉を吐きこぼす。けれど微かな含み笑いととも硬い歯先で乳首を齧られると、意識が遠のくほどの電流が全身をビリ

リイツと貫いてゆく。

(ひはああっ……んうっ、あくっ、うううん……む、にええ……しゅごっ、ひゅっ……)

頭の中はピンクの霧に包まれてなにも考えられず、理性がトロトロに崩れてしまう。呆けた表情で瞳を潤ませていると、そこへ少女が顔を近づけてくる。

「んふっ、可愛い顔してる……食べたくなっちゃうわ……んあっ、ちゅむうっ……」

甘いささやきと熱い吐息が舌先に触れ、そのまま粘膜の塊が唇を塞ぐ。

「んっぐうううう——っつっ、んむっ、んふっ、ふううううっ！——」

少女の舌が蛇のようにくねりながら喉奥にまで滑り込み、他人が触れる機会などない喉粘膜を、ペロペロと舐め上げた。味わったことのない未知の感触と快感が脳天から下腹部まで突き抜け、身体がバラバラになるほどの衝撃に包まれる。刹那、口腔に包まれて唾液でビチャビチャになった乳首の先端が押し開かれ、迸る快楽に背中まで貫かれる。

(んやああああっつ、なにっ、なにいいっつ!! むねっ、むねええっつ、あっいいいっ!)

——ビュルウウツ、ビュクツ、ビュクンツ!

「んひいい——っつ、はひっ、ひいいいんっつ!」

大きく仰け反った全身を痙攣させ、乳房の奥で爆発した快感の嵐に頭の中が毒々しいピンク色に包まれ、塗り潰される。圧倒的な快楽と解放感だけが頭のでっぺんから爪先までを覆い尽くし、唇から乳房から、注ぎ込まれる肉の悦びに全神経が夢中になってしまう。

(んああっつ、だ、ダメッ……我慢っ、我慢、しなきゃ……らめっ、んひうう——っつ! や

っ、ひゃらっ、ひぐっ、イクウウツッ！ イッてるううっ！

すでにびしょびしょに濡れていたブルマを突き破るほどの勢いで、膣口からは牝蜜が噴きこぼれて床板に広がってゆく。粗相したかと思われるほどのはしたない絶頂を見届け、口づけしていた少女が唇を離し、嘲笑うかのようにクスリと微笑んだ。

「あははっ、上も下も大洪水ね、理央」

（はあっ、ああ……イツ、ちゃった……我慢、できなかつたあ……んっ、んんううっ！）

甘噛みされていたニプルが解放され、乳房を掬い上げるようにして先端が眼前に突きだされる。絶頂の余韻でうっすらとしか開けない瞳に映る桃色の乳首からは、白く濁った液体が滲み、乳肉を揉まれるたびにピュルツと勢いよく噴きだしてしまう。

「はうん……な、にひい、これえ……っ！ んひゅっ、ひゃうううっ……」

下から叩くようにして豊乳を揺らし、乳首をコリコリと抜き立てて刺激を送られると、溜まりに溜まった尿意を解放するような心地よさが胸の奥に突き刺さり、弾けた白濁液が顔中に降りかかる。トロリと肌を伝うその乳白色の液体からは、微かな甘い香りとともに嗅ぎ慣れた匂いが立ち上っていた。

「ほらあ、自分のオッパイ美味しい？」「ほら、お口アーンしてえ……あははっ！」

——ピュルツ、ピュルピュルツ！ ビュビュツ、ドビュウツ！

浴びせかけられる白乳を命じられるままに舐め取りながらも、その言葉に愕然とする。

（自分の……そんな……嘘っ……んうううっ！ ど、どうしてこんな……に、妊娠なん

て、してるわけえっ……あひいっ、ひいんっ！)

信じられないけれど、口に広がるのはミルクを薄めたような母乳の味。自分の身体が別のものにすり替わってゆくような感覚に包まれ、恐怖に背中が冷えきってゆく。それなのに、式神によつて肥大化させられた乳腺から射乳する快感は、頭が真っ白になるほどの悦びを訴え、全身を痺れさせてくる。

(はふっ、ひいん……いやっ、やだぁ……じ、自分の、で……こんな、顔っ、ベトベトにいっ……おかっ、おかしいっ、こ、こんなのおっ！)

両乳が左右から押し上げられ、互いに擦れあつて先端からミルクを吐きだし、顔中を白く化粧してゆく。濃厚さはないが、甘い香りに鼻先を包まれながら肌で感じる液体の感触、そして視界を染める白濁——決して思いだしたくはない記憶が、全身の快感とともにゾクゾクと身体の奥から甦ってくる。

(も、う……イツちゃ、ダメ、なのお……ひうんっ！)

「はぁぁ……あむっ、んううっ、んじゅっ……じゆるるう、くちゆう……」

唇に触れた液体をペロリと舐め取ると、頭の裏側に痺れるような快感が奔る。もはや止められない肉欲は勝手に唇を動かし、こぼれ落ちる牝乳をチュウチュウと啜り上げてしまう。唾液と絡まりあつてトロリと喉奥に流れる感触は、懸命に引き締めようとする表情を淫らに緩ませるのに、十分な威力を持つていた。

「ひやうんっ、あむっ、ちゅぱっ、じゆるっ……」

「あーあ、すっかりその気になって……ねーえ、ちょっとおっ！ 理央がもつとミルクを飲みたいそうなのよ。協力してあげられない？」

理央のだらしない表情を見下ろしていた女子の言葉に反応し、何人かの男子が早苗のそばを離れる。二人の美少女の嬌態と淫声に当てられてしまったのか、その目はギラギラと獣欲に光っている。

「へえ、神坂もか……いいぜ、してやるよ」「二人揃ってド淫乱だな、ええ？」

（ふえっ……も、つてえ……ふた、り……つてえ……なに、を……）

視線を無意識に早苗のほうへ向けると、そこにはあまりに凄惨な光景が広がっていた。

「ひやぐうんっ！ あああ……髪、やめて、ください……て、手もお……んひいっ！」  
喘ぎを響かせる早苗の両手には男子たちの怒張が握られており、数名の男子に至っては美しい黒髪をペニスに巻きつけ、先走り絡ませながら必死になって扱っている。すでに何人かは射精にまで達したのか、美しかった早苗の髪にも指にも、ドロドロとした白濁汚液が付着してしまっていた。

「あむっ、んじゅう……ま、まひや、かあ……あうっ、やめ、へえ……」

顔に降りかかる母乳を舐め取り、か細い涙声でささやく理央だが、ニヤリと笑った男子たちはジャージのズボンを下ろして近づいてくる。思わず顔を背けようとするのに、下着の奥から現れたそそり勃つ肉棒と鼻を突く生臭さに視線を惹きつけられ、母乳に塗れた唇の奥に唾液がコポリと溢れだした。



## 第五章 牝豚奴隸

「それでは、本日の生物の授業ですが、先週から言っておいた通り——」

生物教師の言葉を聞いて、理央はビクツと肩を震えさせる。

「精子の観察を行いますので……担当の二人は、男子の精液を採取してください」

年若い女性教師が告げた瞬間、男子たちから一斉に歓声が上がった。

「へへ、そんなじゃ頼むぜ？」「今日のために、一週間溜めといたんだからな」

（やつ……そんなのっ……いい、いやよ、絶対に……）

けれど、そんな胸中の言葉とは裏腹に、理央の身体は精液という言葉を目にしただけで淫らな火照りに包まれ、下腹部が潤いを帯びて痺れてくる。早苗と理央が敗れ、学園が六道の手に落ちてからのひと月近く——毎日のように生徒たちから罵られ続けた肉体は、もはや被虐的な想像だけで発情させられてしまう。

（つつ……ダメ、耐えないと……あたしはまだ、負けてない……堕ちて、ないっ……）

ただ、六道の与える圧倒的な快感に一度は屈しかけた理央だったが、その心の奥ではいまだに反攻を諦めてはいなかった。プライドというよりも意地で心を支え、向けられる悪意に立ち向かおうとする理央。けれど——。

「はい、わかりました。わたくしで、よろしければ……」

拒絶を考えた理央とは対照的に、艶のある笑顔で優しく微笑んだ早苗は、周囲からの要望に応えて立ち上がった。そして淫らな欲望に染まる瞳を細め、彼らの欲求をその身で満たすべく、教室前の空いたスペースにゆっくりと歩みを進める。

（早苗……また、そんなこと言って……っ）

六道からの度重なる陵辱を受け、幾度にも強制された服従の言葉と行動に、いまや早苗の心と身体は完全に支配され、肉欲の虜とされていた。しかも六道から命じられ、男子たちの要求には常日頃から、すべて積極的に応じている。その証として、いまの彼女は下着を一枚も身に着けておらず、汚れたブレザーに第二ボタンまでを開いたブラウスと、股下数ミリしかない超ミニスカートという、男子たちから命じられた服装をしているのだ。

「どうぞ、皆様、こちらまでおいでくださいませ。拙い奉仕ではございますが、殿方の大切な子種を、採取させていただきたく存じますので……よろしくお願い致します」

服装こそ娼婦のように淫らではしたくないものだが、床に正座して三つ指をつき、深く頭を下げるその仕草には、大和撫子と呼ぶに相応しい淑やかさと艶が感じられた。

「よしよし、やっぱり早苗はお利口だなあ」「女の……いや、肉便女の鑑だぜ」

下卑た笑みを浮かべ、早苗の色香に惹かれた男子たちが近づいてそう声をかけると、早苗はポツと頬を赤らめて、はにかんだように表情を綻ばせる。

「そんな……ですが、嬉しいです。ありがとうございます……んっ、はあ、あむう……」

明らかな侮蔑の言葉だというのに、それこそが自分にとっての最大の賛辞であるかのよ

うに早苗は喜びを露わにし、男子たちの股間に顔を擦り寄せてゆく。柔らかな頬をプニプニと押しつけ、衣服越しに感じる男根の硬い感触にうっとり瞳を細めると、唇と歯先だけで器用にフラスナーを下ろし、下着の上からペニスにむしゃぶりついてしまう。

「んふっ、ふぁ……あひえくひやくつて、おいひいれすう……んむっ、じゆるる……ろうぞ、ご遠慮なくおらひになつてえ……精いっぱい、ご奉仕いたひまひゅう……」

ピチャ、ピチャ……と甲高い水音を響かせながら、両手は別の男子の肉棒を抜き、さらに背後の男子の股間にお尻を擦りつけて、尻コキでも精液を採取しようとする。その動きはどれもが超一流の風俗嬢のように見事な技術で、男子たちはすぐにでも射精してしまいそうに息を荒くし、腰をヒクつかせている。

「くあっ……相変わらず、うめえなあ……」「こんだけ素直で淫乱で……最高の肉穴だぜ、本当によ」「ま、最初だけは素直じゃねえ……つて奴も、いるけどなあ？」

その言葉とともに男子たちがゲラゲラと笑い、遠巻きに眺めていた女子たちもクスクスと嘲るような笑いをもらしながら、その視線を一点に集中させる。

「ほんとよねえ、すぐに欲しがらんだから、最初っから素直になればいいのに」「まあいいんじゃない？ それもあのコの可愛いところだし……」「耐えて耐えて……それで結局耐えきれなくなつて泣きながらおねだりするとこなんて、最ッ高よねえ」

聞こえよがしにささやかれる言葉を耳にし、理央は恥辱で全身を真っ赤に染めて顔も上げられず、膝の上でキュッと拳を固める。皆が口にするのが誰のことか、そんなことは

つきりとわかっている。あれから毎日のように、理央と早苗は学園のあちこちで淫らな行為を強制されていた。早苗と違い、理央はいつも拒絶してはいたが——いつしか肉欲の誘惑に負け、恥ずかしいおねだりをしてしまうことは、はつきりと記憶に残っている。

(う、うるさいっ……あたしは、あ……あたし、はあ……別につ、欲しくなんてっ……)

必死に胸中で叫びはするものの、淫猥な光景を見せつけられ、卑猥な音に耳を打たれるだけで、すでに唇は半開きになってしまっている。大量の唾液が机の上に溢れ、さらに床にまで滴り落ちて、小さな水溜まりにまで広がっている始末だ。

「んじゅっ、んんうう……ちゅぱっ、はああ……ふふ、理央ちゃんは根が淫乱ですからね……ちゃんと躡けてあげれば、わたくしなどより立派な奴隸になりますよ……」

(お……お願いっ、早苗……そんな風に、見ないで……言わないで……)

意味ありげな視線を向けられ、背筋がゾクリと冷たく震える。自分を辱めるためにそんなことを言っている、それはわかっているのに——その落ち着いた口調で責められると、本当にそうなのではないかと錯覚させられそうになる。

(ダ、ダメよっ……あたしは、耐えるんだからっ……本家からの救援を待って、早苗を元に戻して……く、屈したり、しない……絶対に……っ)

学園での不自由な生活を強要されながら、周囲の目を盗んでなんとか本家へ飛ばした式符——一縷の望みをその細い命綱に託し、震える手を握り固める。自分ではもう早苗を助けることもできないし、六道を捕えることもできない。けれど、早苗の危機と惨状を訴え

るこの手紙さえ統領の手に渡れば、実の娘のために宗家を動かしてくれるはず。手練揃いの総本山がその気になれば、六道を捕えることも容易に違いない。

(ありがたいことに、まだ気づかれていないみたいだし……はうっ、んっ、あ……)

六道と早苗、もしどちらかにでも気づかれてしまえば、それ相応の仕置きなどが与えられることだろう。それを受けては今度こそ、正気を保っていられるかわからない。

(お願い、だから……早く、助けを……ひうっ、ん……あ、たしもお……もう、どこまで耐えられるか……あぐっ、ふうう……)

唾液を押しえるように口元に手を宛てがうと、敏感な唇と擦れ、声がもれそうになる。

「ほらほら、早くいつものやってよ」「なにが欲しいんだっけ？ 淫乱なザーメン会長さんは？」「おねだりしないと、誰もしてくれないわよ？ 変態さん？」

「だ……誰がっ、するもんですか……あたしは、へ……変態なんかじゃ、ないっ……」

傍目に見ても明らかな理央の発情、それでも牝の本能を抑え込もうとする理央の姿に、周囲の少女たちが冷たく唇を歪める。

「ふーん、あつそお……」「ま、いいんじゃない？」「そうね、いい機会だし」

「え——あ、ちよっ……な、なにをっ……きゃっ」

周囲の雰囲気が変わるのを感じた瞬間、両手を絡め取られて理央は慌てふためく。気がついたときにはすでに遅く、手錠で両手を背中に留められ、首輪まで嵌められてしまう。

「なっ、なにすんのよっ！ 放してっ……外しなさい！」

「あははっ、いい格好ねえ、牝犬ちゃん？」ほーら、こうやって鎖つけちゃえば……はい、完成〜」「ふふ〜、動けないでしょ〜?」「そこでしばらく、おとなしく見てなさい」

首輪から伸びる鎖を床に近い位置で固定され、両手の自由を奪われたまま膝立ちに拘束される。必死に逃れようともがくが、立ち上がろうとすると鎖に首輪を引かれ、犬のように伏せた体勢しか取ることができない。ただ、彼女らにはそれ以上にかしようにという考えはないようで、そのまま遠巻きにニヤニヤと眺められるばかりだった。

(つつ……なんのつもりよ、いったい……)

床に頬を擦りつけて悔しさを滲ませながら、理央は睨むような視線を上げる。その前には、なにかを口に含んだまま笑みを浮かべている、早苗の妖艶な表情があった。

「早苗っ……お願い、正気に戻って……」

無駄とはわかっていても、そう懇願せずにはいられなかった。彼女さえ自分と同じ意思を持って、目的のために協力することができれば耐えられるのに——そんな希望を踏みこじるかのように、早苗が桃花のような唇をゆつくりと開いてゆく。

「ほああ……見れくらさあい、理央ちゃあん……んじゅっ、へええ……こえはあ、皆さんから恵んでいただいた、プリップリのザーメンれすよお……」

呂律の回らない状態で説明するその言葉通り、早苗の口内にたつぷりと溜められていたのは、男子数名から集めた大量の精液だった。黒髪少女の唾液から漂う甘い香りと、精液独特の青臭さが入り混じり、淫猥で頭がクラクラするような匂いが鼻を痺れさせる。肺奥

を犯すように染み広がるその香りに灼かれ、理央は自分の腫が熱っぽく潤んでしまい、口内粘膜が新たな唾液で濡れていくのがはつきりと感じられた。

「ふあっ、はあっ、はああ……んっ、くっ……そ、それが、なによっ……」

また口移しで飲まされるのか、それとも顔にでもまぶし広げられてしまうのだろうか。どちらにせよ屈辱的な未来が待っていると想像するだけで、下腹部の奥がキュンッと切なく疼く。いやらしい匂いに口内や肌を犯される——知らず、そんな期待をしてしまった肉体は、心まで蕩かしてしまうほどの快感に震える。けれど——。

「なに……と、おっひやられへも……ああ、もひかひてえ、飲みたいのれすかあ？」

クスリと小さく微笑んで嘲るようにささやかれた早苗の言葉に、自分がなにを考えていたかをようやく自覚し、カアアッと顔が赤く染まつてゆく。

「なっ……だ、誰がっ！ 違うわよっ、そんなわけないでしょっ……」

「そうれふよねえ？ ふふ、残念れすけるお、こひらは観察用の、たいひえつな、精液れすからあ……こうひへえ……んべえ、えええ……んっ、ピーカーに入れておかないと」

床に置かれた大きめのピーカーに、唇からダラダラと流れる精液が、粘糸を引いて注がれてゆく。空気に触れてさらに濃くなった精臭がツンと突き抜け、それだけで口内にザーメンの甘苦い味が広がるように思え、ゾクゾクツと背筋が粟立つてくる。

（早苗、早苗え……ああ、あんなに嬉しそうな顔して……）

自らの身体の反応を恥じながらも、そんな早苗の笑顔から視線を外すことができない。

鼻先を卑猥な香りに犯され、視線を美少女の艶めかしい笑顔に惹かれながら、無意識に理央は太ももを擦り合わせ、軽く緩んでしまった陰唇の疼きを慰めるように身を振ってしまふ。その僅かな動きだけで、性感帯として磨かれた両脚は狂おしいほどの快感を生み、頭の奥まで痺れさせてくる。たまらない肉悦にトロンと瞳を潤ませたその目の前では、さらに淫靡な光景が広がるようになっていた。

「んはっ、ひはああ——つつつ！ ひやうんっ、んあっ……あふっ、い、いきなり後ろからなんてえ……あんっ、んううっ！ 嬉しい……気持ち、いいですう……はあんっ！」

欲情を滾らせた男子が、こちらを向いた早苗の背後から彼女にのし掛かり、ドロドロに濡れそぼった肉壺へ怒張を突き立てる。脚を伸ばして馬跳びの馬のように上体を倒した体勢で、淫穴を激しく貫かれながら早苗が喘ぎ悶える。グツチュ、グチュウ……と結合部から響く粘水音が頭を満たし、パンパンと肉のぶつかり合う打擲音が心揺さぶられる。

「あふっ、ひやうううんっ！ んあっ、ああ……んふふっ、新しいオチンポ様あ……ありがとうございます、はあ……あむう、んむっ……じゅっ、ちゅぽお……」

その姿は完全に、肉欲に溺れた娼婦のようだった。自分の身体が性欲処理に使われることに喜びを見出し、牝の欲望に対してお礼を述べる。そんな自らのはしたない姿と屈辱的な扱われ方、そして行為自体に早苗はどこまでも興奮しているのだろう、肉棒を咥え込んだ上下の艶唇から、ダラダラと涎を溢れさせていた。

（……そ、そんなに……気持ちいいの、早苗……んっ、ふあ……はうう……）

激しい性交を無理やり見せつけられながら、意識も視線も外すことができない。男女の淫液が混じりあった卑猥な臭気に鼻腔をくすぐられると、それだけで唇が緩みきってしまい、腫がトロンと熱っぽく潤んでくる。

「ちよつと、床が涎で汚れてるんだけど？」「あはっ、エロい顔してるわねえ」

「ふえ……んっ、あっ……ち、違っ……うんっ、はっ、ひああ……」

女子からの指摘で自分の物欲しそうな態度を自覚し、羞恥に顔が真っ赤になる。そんな理央の姿を誰よりも近くで見ていた早苗は、クスリと微笑んで口を開いた。

「あんっ、はああんっ……し、仕方ありませんよお、理央ちゃんは……んうっ、んふふ……鼻まで式祝で敏感にされて、精液の甘あい匂いだけでも興奮できる……いいえ、イツちやえるようになった、ド変態ですからあ……あうっ、んはっ、やはああんっつ！」

「ひやうっ……あっ、う、嘘よっ、そんな……こ、くううんっ！」

早苗から聞かされた言葉は、理央にとって寝耳に水だった。鼻にまで式をつけられたなど、少なくともこうして支配を受けるようになってからは記憶にない。

（だ、だけどお……んぐっ、ひっ、いい……に、臭いだけで、こんなに、なっっちゃうなんて……ほん、とにい……ひぐっ、うううん……）

ヒクヒクと動く小鼻に、ニッコリと微笑む早苗の唇やビーカーから精液臭が届いて、陰唇の奥がキュンッと締めつけられたように震える。緩んだ唇から舌が垂れ、すぐそばにあるビーカーの中身を求めるかのように、チロチロと動いてしまう。その眼前で――。

「ひやううううつ、あひつ、ひぎいいい——つつ！ イクツ、イキますううつ……んあつ、あつはああつつ、れてつ、れてましゅうううつ！ はひつ、子宮つ、いひいいつ！」

大きく腰を突きだして犯されていた早苗が、ビクビクウツと上体を激しく痙攣させながら仰け反らせ、声高に絶頂を訴える。頭が激しく振り乱されると、汗の滴がキラキラと舞い飛び、甘酸っぱい牝のフェロモンが周囲に漂ってくる。唇からこぼれた肉棒を片手でコシユコシユと丁寧に、慈しむように扱きながらも表情は蕩けさせ、全身が跳ね震えていた。「はあつ、あつ、あああ……しゅご、いひい……ひんつ、んあつ……熱いの、し……子宮の、奥まれえ……ひふつ、と、溶けりゅう……ふううん、んつ……ああ……」

盛大な射精を終えた少年が腰を引くと、肉壁をめくり返しながらペニスが抜け落ちてゆく。強烈な絶頂と、肉体の奥深くに注がれた濃厚な精液で下半身が骨抜きにされたのか、早苗はガクガクと震える膝を床について、お尻を突き上げた犬のような体勢になる。

「あ、はつ、あはあ……み、皆さん、申し訳、ありません……お、お見苦しい姿を……んつ、くふう……ふあつ、すごおい……こんなに濃厚な精液、たあつぷりい……んつ」

子宮内を満たす熱い感触に表情を蕩けさせる早苗、その鼻にかかった甘い吐息に興奮を誘われ、別の男子が背後から黒髪少女に襲いかかる。

「え……やああんつ♥ あ、焦らないでください……はうつ、うううんつ！ あひゅつ、んふうう……お、おひりはあ……はううつ♥ か、感じすぎてえ……ひへえ……」

膝の裏側に手を添えられ、M字開脚に抱えられた早苗はアナルを刺し貫かれて身をくね

らせる。肛門を犯されて感じるアブノーマルな姿を見られることに快感を覚え、艶めかしい声で叫ぶ様子が、嗜虐的に笑う少女たちの目を愉しませる。

「この変態、こんなトコ見られて悦んでるわよ」「うっわ、信じられない……最低ね」「同じ女として見られるのが、恥ずかしくなるわ」「まったく、恥知らずな牝犬よね……」

辛辣な言葉を吐きながらも、学園のアイドル扱いされていた副会長が墮落した姿を見て、溜飲を下げているようだった。そんな扱いを受けても早苗は辛そうな表情を欠片も見せず、快楽に溺れたいやらしい顔を見せつけ、はしたなく腰を揺すつてしまう。

「んうっ、んんく……は、恥ずかしいです……♥ あはっ、あはあ……い、いかがです、理央ちゃん……んはっ、はや、く、素直になればあ……理央ちゃんも、皆さんにこうやって、可愛がついていただけなんですよお……？ あひっ、ひいんっ！」

角度をつけて腰を突き上げられてまたも喘ぎをもらし、それでも別の男子の肉棒からは手を離そうとしない。自らの淫液でテラテラと濡れ光る卑猥な媚肉から精液を溢れさせ、恍惚とした笑みを浮かべる早苗の姿は、理央の心に誘惑の牙を食い込ませる。

(つつ……い、いやあ……あた、しはあ……そ、そんなの、い……いや、なのお……)

淫靡な悦びを覚え込まされ、ペニスを見るだけで発情してしまうはしたない肉体が、素直になれと命じてくる。床へうつ伏せにさせられ、その身には一切触れられていないというのに、スカートの奥では開花した肉華がダラダラと淫液を吐きもらしてショーツを汚し、硬くなった乳突起がブラの裏側をコリコリと擦ってしまう。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)

全国書店で  
**好評発売中**



**「…藤田君は責任取るべき」**  
睦月への想いに身を焦がすマキナ  
彼女は夜の教室で……!?

小説：さかき傘 / 挿絵：天海雪乃

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

女幹部メル様の  
**セカイ征服計画!**

小説：高岡智空 / 挿絵：鈴眼依縫



2010  
**8月下旬**  
発売予定!!

悪の秘密結社vs正義のヒーロー  
イケない戦いの記録!

全国書店で  
**好評発売中**



**「当方Mドレイ希望」**  
魔界最強のプリンセスがドレイ志願?!

小説：酒井仁 / 挿絵：にの子

不死の吸血姫がDSのご主人様を募集  
しているようです

- 既刊LINEUP**
- 仙獄学園戦姫 / ノナガリ! ①～③
  - 借金お嬢クリス ①～③
  - 純爛! 帝都少女探偵団 赤い寶珠を掌て!
  - プリンセスリバーシ!! 文藝する美姫と魔姫
  - BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜
  - 無敵の短騎士がDMに目覚めたようです
  - ビルグリムメイデン ①～②
  - 呪詛喰らい部【カースイーター】
  - 魔海少女ルイルエール



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**ヴァルキリエ**  
コミック

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

**cranberry**  
ブランド

<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

**mille-feuille**  
ブランド

<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

**モバイル二次元ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!